

令和元年度 第1回恵庭市学力・体力向上推進会議 会議録

〔開催日時〕 令和元年7月23日（火）13：30～14：40

〔開催場所〕 恵庭市役所 3階 301・302会議室

〔出席者（敬称略・順不同）〕

委員長／長岡 秀明（恵庭市教育委員会点検評価委員会）

副委員長／川原 淳一（恵庭市PTA連合会）

委 員／田島 与久（恵庭市教育委員会点検評価委員会）

結城 健介（恵庭市教育委員会点検評価委員会）

谷口みどり（恵庭市小中学校校長会）

藤村 哲子（恵庭市小中学校教頭会）

佐々木 保（若草小学校・柏陽中学校 学校運営協議会）

木村 博子（恵庭市教育委員会指導主事：学力向上アドバイザー）

河内 紀彦（北海道ハイテクACアカデミー）

事務局／教育長、教育部長、教育部次長、教育総務課長、教育総務課主査・スタッフ・指導主事

〔傍聴者〕 1名

〔内 容〕 ※長岡委員長が進行

1. 開会
2. 委嘱状の交付（穂積教育長→河内委員）
3. 委員長挨拶（長岡委員長）
4. 教育長挨拶（穂積教育長）
5. 議事

学力・体力の取組について

事務局より説明

【説明要旨】

平成30年度は会議を3回開催し、委員の皆様から貴重なご意見をいただいた。それを踏まえ、今年度は「小学校体育授業支援」「委託ALTの1名増員」「地域人材の活用」など、学力・体力向上に係る施策を拡大することができた。

本日は、学力・体力向上に係る主な施策について、実施状況や課題、次年度以降の方向性を説明した後、委員の皆様よりご意見をいただきたい。

①学力向上について

「標準学力検査（NRT）」については、小学2年生から中学3年生までを対象に毎年



4月に実施している。各校で結果を分析し学習改善の取組に活用できることなどから、今後も継続して実施する。

「英検 I B A」については、平成30年度は中学2年生を対象に実施した。今年度も実施を継続することで、前年度との比較が可能となること、また、結果もわかりやすく、学校全体の傾向や生徒個人の課題も的確に把握できることから、当初は中学校とも協議したうえで対象を中学1・2年生に拡大して実施することとしていたが、道教委の英語力向上事業として、道内の全中学生を対象に「3年間」実施となったことから、今年度については、本市でも中学1年生から3年生までを対象に10月に実施する予定としている。

「ALTの配置、外国語指導に係る地域人材の活用」については、新学習指導要領への移行に伴う時数増に対応するため、ALTを前年度より1名増員、地域人材を活用している学校を前年度より1校増設した。各校の意見を元に、次年度の完全実施に伴う時数増に向けて、さらにALTの増員等を検討する。

「教職員への研修、環境整備等」については、教職員への研修としてサマーセミナー・ウインターセミナー、環境整備として学習支援員の任用、ICT環境の整備などを実施。また「電子黒板」や「デジタル教科書」などの環境整備を図ることで、教員の意欲向上や授業の質の向上から「学力向上」につなげたい。

「地域人材による学習指導」については、学生ボランティアの協力や、学校運営協議会の活動として、「放課後学習会」や「土曜スクール」を実施している学校がある。学校運営協議会は令和3年度までに全校に設置する予定であり、取組の広がりが期待できる。

②体力向上について

「小学校体育授業への支援」について、今年度から市教委が全小学校の実施希望を取りまとめ、「北海道ハイテクACアカデミー」及び「セントラルフィットネスクラブ恵み野」から指導員を派遣し、体育授業を実施している。派遣を受けた学校からは「児童が意欲的に学ぶことができた」「教員が指導方法について学ぶことができた」といった意見があり、「児童の体力・運動能力の向上」や「教員の指導力の向上」に一定の効果があると見込まれることから、引き続き事業実施の効果や課題について検証したうえ、次年度は派遣回数を増やすことも検討したい。

【質疑応答等】

A委員：順調にいろいろな事業実施が成されている。要望等もまだまだ増えてきているところ。英検の関係（I B A）でお金がかからないのは驚いた。費用の措置が切れた時のこともあるかと思う。

B委員：デジタル教科書について。小学校4教科、中学校5教科との記載があり、（使用

されている)教科名は分かるが、全学年分ということで間違いないか。

事務局：はい。

B委員：学校で一冊ということになるのか。

事務局：各学校で、該当の教科分のライセンスを購入すれば、その学校において使用が可能という仕組みになっている。

B委員：コピーは可能なのか。

事務局：コピーというよりは、学校で一つ購入すれば、電子黒板等を利用してどこのクラスでも使うことができる。

B委員：全クラスで同じような授業が可能なのか。

事務局：可能である。

C委員：体力向上について。ハイテクの指導員を講師として招いていると思うが、指導方法について知りたい。指導員が直接子どもに対して指導しているのか、先生を通して間接的に子どもへ指導しているのか。

D委員：ハイテクとしては昨年度から各小学校で指導しているところではあるが、小学校ごと・担当の先生ごとに方法は異なるため、それに合わせる形で指導している。先生に全面的にお任せする時もあるれば、先生の指導に加えてアドバイスをする時もある。こういった指導をしてほしいかなどの情報を、本来であれば共有するのが望ましいが、現場の先生とコミュニケーションをとるのが難しく、今後の課題であると感じている。

C委員：講師は複数派遣できるのか。

D委員：今のところ3名で行っている。

A委員：(D委員のおっしゃるとおり、)できるだけ事前打合せの時間が取れれば、なお良い。

C委員：TT(ティーム・ティーチング)について。恵庭市では既に各校で実績があるかと思うが、教室の使い方を教えていただきたい。複数の教室に分かれるのか、オープンスペースのような場所を複数に仕切るのか。

E委員：学校によって異なる。1教室に2名(担任ともう1名)がいて(片方がメインで授業をしている間に)もう1名が個別指導等を行う方法、学習段階に応じてクラスを分ける(習熟度別)方法、また少人数学級を更に分ける方法もある。学校の実態や児童生徒の学力、授業の単元等に応じて臨機応変に行っている。

6. 意見交換

F委員：英検I B Aについて。前年度の時点で英語担当の先生や教頭先生等と話し合い、中学校1・2年生を対象に恵庭市独自で実施することが決定していたが、今年度より道教委主催で実施することとなった旨の通知があった。そこでは中学3年生も対象と

なっているが、教育課程の中で実施する時間を作らなければならない、入試等もあるため時数がぎりぎりになってしまう。また全国学力・学習状況調査等も含め、3年生への負担が大きくなることを心配している。結局、道教委主催で10月に実施することが決まったため、3年生へのフォローをしていかなければならない。また、IBAは資格とは異なるので、中学3年生になったら実際の英検を受検させた方が、合格したらそのまま資格として保有できることから良いと考えていたところである。ただ、受験料が高いため、実現するならば予算を配分する必要があると思う。道教委においては3年間の実施が予定されているので、その結果を見たいと思っている。

全国学力・学習状況調査について。今年度から問題の形式が変わった。従前はA（知識）・B（活用）に分かれていたが、今回はそれが1つになっている。そのため、今回の結果を前年度の結果と比較することができなくなったが、次年度との比較はできると思う。

G委員：英検IBAについては、3年生が受検する時間を作ることと、せっかくなので英検の受検にも繋げたいということがあり、3年生の実施は時期的に難しいだろうとのことだったので、今回3年生がIBAを受検することになり、英語の先生と適切な時期と時間について話し合ったが、結局は同じ時期に行うのが良いだろうと結論付けた。今年の3年生は2年生の時にIBAを体験しているので、戸惑いがないという点は良かった。

英語といえば、全国学力・学習状況調査で英語が初めて実施されたが、特に「話すこと」調査の結果を楽しみにしているところ。恵庭市全体の英語力が分かって良いと思う。

C委員：小学校の子どもに将来の夢として人気の職種を尋ねたところ、プログラマーという言葉聞いた。今の子どもはいろんな形でプログラミングに触れる機会が多いことが理由ではないかと思う。ただ、自分たちの世代からはあまり想像できないため、プログラミング教育について詳しく教えていただきたい。

E委員：プログラミング教育自体は来年度から必修となり、今は担当の先生がソフト等を使って研修を行っている段階。子どもたちの言うプログラマーは恐らくゲームプログラマーのことではないか。現段階では学校におけるプログラミング教育が影響しているとは言えない。来年以降の必修化によって更に増える可能性は考えられなくはないが、子どもたちが一番関心を持っているのがゲームということもあり、将来の夢にゲームプログラマーを挙げる子どもは確かに増えてきている。子どもたちの方がそういったことに関しては進んでいるので、自分もついていけない時があるが、スマホ（の利用や規制）については考えていかななくてはならない。子どもや保護者への指導が必

要。

A委員：今は、動画で理科の実験等を見ることができるようになっている。子どもたちがどのようなことを押さえているのか、先生方がどのように指導したいのか、そのあたりにも難しい葛藤が出てきそうに思う。

G委員：体力向上について。体力調査の結果がこれから出てくるところであり、その結果を元に各学校において体力向上プランを作成していくこととなる。恵庭市全体として握力が低い傾向があるが、純粹に握力が低いのか、握力計に問題があるのか、また測り方（握力計の使い方）が間違っているのか判断が難しい。次年度から握力計を新調しようとも考えたが、値段が高い。他の学校でも、測定器具が影響している可能性に思い至っていないのではないかと思います、この場で提案した。測定器具の検査等を行うのはどうか。（もし測定器具に問題がなければ実際に握力が低いという結果となり、今後の対策にもつながる）

事務局：（測定器具を）調べること、あるいは恵庭南高等学校等からの貸与という方法もある。

事務局：体力調査は文部科学省で実施しているものかと思う。実施種目の変更が検討されていたように記憶している。

G委員：現在の種目は、20mシャトルランと持久走の選択（大半はシャトルランを実施）、握力、上体起こし、長座体前屈、反復横跳び、50m走、立ち幅跳び、ソフトボール（ハンドボール）投げである。

事務局：握力測定の正確性については、人によってずれがある。特に小学生は指の長さが違うため、適切に第二関節が90度になる状態で測定しなければならない。また、本来は握力計を体側から離して測定するのだが、体側に握力計をつけると余計に力が入ってしまう。ただ、通常学校で使う台数（2・3台）であれば体育協会でも所持しているため、調整することが可能と思う。その際には統一した器具を使用した方が、より客観的な結果になる。

事務局：北海道の握力は全国平均よりも高い結果になるのだが、恵庭は毎年低い傾向にあるように思う。

G委員：シャトルランは飛び抜けて高いが、握力だけは低い。

事務局：普段の生活において握ることをしないからではないか。

D委員：主に測り方が原因かと思う。測り方によって結果が10kg近く変わることもある。ただ、2台で1クラス分の測定を行わなければならないので、測る側は大変かと思う。

G委員：児童生徒一人ずつに先生がつくことはまずない。カリキュラム上、握力だけに

時間を使えないので、どうしても児童生徒に任せてしまう。事前に説明しても、グリップの調節が面倒になってくると前の児童生徒が使ったままの状態ですることもある。なんとか良い方法がないかと思う。

D委員：測り方だけでも先生方を集めて伝えさせてもらうなど、やり方によって数値は大きく変わる。確かに握る力自体も落ちているとは思いますが、測り方である程度は解決できる。ハイテクにも測定器具はあるので、使っていただければ。

B委員：体力調査について。報告書に過去3年間との比較があるが、持久力が低いのか。小学校のシャトルランの結果は男女ともに「▼」あるいは「◆」（いずれも平均を下回することを示す記号）と示されている。一方、中学校女子は「△」（平均を上回することを示す記号）となっているが、これは小学校の授業における持久走や休み時間の体力づくりの取り組みが減ったことに比べて、中学校では800m走や1500m走等が体育の種目に位置づけられていることで結果が回復しているのか。そのあたりの分析があったら良いと思う。3～5年くらいで落ちているのであれば、全市的に対策を考えていくことが必要。

E委員：小学校でもマラソン大会を実施しなくなった。長距離を走らせることによる負担から、長距離走や持久走を授業で取り扱うことが難しくなっている。シャトルランの結果が悪かったときには、代わりに縄跳びなどで体力づくりの取り組みを行っている。そのおかげか、少し結果が伸びてきたように思う。

H委員：現在、適応指導教室「ふれあいルーム」にて不登校の児童生徒と関わっている。病気や経済的な理由を除いて年間30日以上欠席する不登校児童生徒は、全国的にも、また恵庭市においても増加傾向にある。その中にはいじめが原因であるものもあり、メディア等ではそれを中心に上げられているが、実際に接してみると、いじめによる不登校よりも、学習意欲の減少や授業についていけないといったことが原因で不登校になった子どもが多い。マンツーマンで個別に教えることができるようになる子どもも多いが、勉強に対して強い拒否感を持つ子もいて、やる気を引き出すことが難しい。また、将来に対する思いが薄い子どもが多い。新しい学習指導要領においてもキャリア教育について言及されているが、子どもたちの将来に対する思いや、学習意欲を向上させることについて、先生方一人一人にも意識していただければ。

F委員：北海道ハイテクノロジー専門学校での補習授業では、数学において小5・6・中1くらいの内容でつまづく学生が多かった。話を聞くと、今までは苦手な教科をなるべく避けてきたとのことだった。分からない時は分かる人に聞くしかないなので、その際の周りの対応で、質問したこと自体を肯定することが重要。小中学校のうちから質問しやすい環境を整え、分からないことをそのままにせず、その都度質問ができる

人間に育てていくことが大切。

A委員：「何を質問したら良いのか分からない」という子もよくいるが、そういったことも一因なのかと思った。家庭教育でも学校教育においても最大の目標になるのかと思う。

E委員：一人の先生が全てに対応することはなかなか難しいかとは思いますが、T Tによって解決できる場合もある。学力向上のためにも、多くの子を見てあげられる人員が必要。

C委員：間違えたまま、分からないままであることが認められているような世間の空気も一因ではないか。少人数学級や習熟度別学習において、分からなかったり間違ったりしたものをそのままにせず、そのうえで認めていくような雰囲気が、学校や世間で大事にされていけばまた変わってくると思う。

事務局：A L Tや英語の授業について、何か意見があればお願いしたい。

E委員：本校ではA L Tの授業カバー率が100%となっているが、A L Tだけではなく、A L Tでカバーできない分は地域人材に入ってもらい、それを合わせて100%となっている。

G委員：中学校において、カバー率は十分かと思う。委託の形式だと事務手続きが若干煩雑（前の週に事前に授業内容を送らなければならない点等）。人数というよりは、A L Tの質を重要視したい。最近、指導経験の少ないA L Tが多いように思う。中学校であれば意思の疎通がある程度可能だが、小学校の先生が、英語しか話せないA L Tとやり取りをするのは少し大変かと思う。指導経験のあるA L Tが小学校に就けば、小学校の先生方は助かるのではないか。

事務局：J E TのA L Tについては市町村の所属になるので、何かあればすぐに学校とやり取りできるが、委託A L Tについては委託業者からの派遣となっている。

事務局：派遣の契約方法が変更となったこともあり、先生方も混乱していると思う。整理しながら進めているところではあるが、事務が煩雑ということであれば、派遣会社と調整していきたい。

7. 次回の会議日程について

次回の会議は、9月に開催予定。

8. 閉会